

保田與重郎『後鳥羽院』の構造可視化

—日本語文章の絵解き—

谷 口 敏 夫

0 目次

- 1 はじめに
- 2 調査の目的と方法
- 3 文章地図
 3. 1 用語の分類
 - (1) 人名の概略
 - (2) 事項名（作品・詩歌用語など）の概略と分類
 - (3) 用語の傾向
 3. 2 事項と人物の認定
 - (1) 事項・人物の名寄せについて
 - (2) 事項・人物の概説
- 4 クラスタ分析
 4. 1 事項・人物のクラスタ分析
 - (1) {◎松尾芭蕉、◎俳諧}
 - (2) ◎国学～◎上田秋成
 - (3) {{◎和歌、◎後鳥羽院}、◎新古今和歌集} ◎承久変
 4. 2 事項・人物地図に表れた小概念
 - (1) 文章地図全体の概略
 - (2) 文章地図の通時的分析
 - (3) 文章地図の共時的分析
 - (4) その他の特異なパターン

1 はじめに



評論家保田與重郎『後鳥羽院』（写真は萬里閣本）は、谷崎昭男の講談社保田與重郎の全集解題によれば初版を昭和十四年十月一日に思潮社から出した。本論で扱った増補新版は昭和十七年五月十五日・萬里閣刊のものである。初版と増補新版との大きな違いは、出版社の変更と、三篇の増補にある。初版に較べて巻末に「承久拾遺」「契沖と芭蕉」「國學の源流」が追加された。本論ではテキストとして講談社全集の第八巻を元にした新学社の保田與重郎文庫（4）とした。

さて、以下2の「調査の目的と方法」で各篇の執筆年を詳述するが、今回の『後鳥羽院（増補新版）』は、いわゆる書き下しの長編評論ではない。これまでの調査は、{日本の文學史、日本浪漫派の時代、萬葉集の精神、現代畸人傳、日本の美術史、芭蕉}と続き、萬葉集の精神は若干集成の部分もあるが、他は純粋にモノグラフで、時系列が章立てとして明確に現れていた。それぞれ別個に執筆された各篇のうち、谷崎の考査によれば保田自身の意図として「後鳥羽院論」を構成した篇は、「日本文藝の伝統を愛しむ」、「物語と歌」、「芭蕉の新しい生命」の三篇となる。

ただし、読者としてはこの図書を最初に手にしたとき、そのような委曲なく、巻頭から巻末に向かって読み、それが数度にわたれば、保田の『後鳥羽院』とは、この増補新版の目次にある各章によって成立した単行図書であると、既定のこととなる。また、著者もこの形態で戦前、戦後を通して後鳥羽院論の典拠と見なしてきたのだから、各篇の初出およびその前後を詳しく考えることは、書誌学上では必須のことであるが、文藝一般、なかんずく本稿の目的とする絵解き

からは、この形態や順序を固定のものに見なすのが妥当と考えた。

ところで本論は先回の芭蕉の絵解き^{※1}と密接な関連を持つ。保田は芭蕉を中世後鳥羽院以降・隠遁詩人の系譜で最後の詩人ととらえている。「後鳥羽院以降」とは承久三年（1221）の変で後鳥羽院が鎌倉幕府執権北条氏に破れ隠岐島に流され、その地で60歳・延応元年（1239）に亡くなった以降を指す。芭蕉について保田は天津市膳所にある義仲寺の昭和再建に関わり、保田の墓は木曾義仲や芭蕉とともにその地にある。保田は芭蕉の弟子の向井去来が庵したという京都市右京区嵯峨野・落柿舎の再建復興にも関与し、一時期その庵主も勤めた。

こういう前提のなかでの本論『後鳥羽院』について、私は長く芭蕉の源流が後鳥羽院という風に考えていたが、後鳥羽院論は芭蕉論の一部であった可能性を、谷崎昭男の講談社・保田與重郎全集解題から示唆された。

そのことを検証する心つもりで今夏の論考に努めたが、『後鳥羽院（増補新版）』の中では、始まりと継承という時系列が明確に現れた事実以外に、従来の私の手法では、後鳥羽院と芭蕉との包含関係は解けなかった。

本論は保田の『後鳥羽院（増補新版）』を題材に、「このテキスト中の用語を抽出し、その傾向を分析し文章地図にまとめた。その用語の一つ一つには保田の肉声が宿っているが、恣意に依らない再現性を伴う方法論で分析をした。^{※2}」と言えるが、同じ方法論を用いても、過去の諸作とは違った文章地図がみられたことを最初に記しておく。

2 調査の目的と方法

本論の目的は保田の特色ある日本文学史として、中世・後鳥羽院から近世・松尾芭蕉への伝統と雅の地下水脈のような系譜を説いた『後鳥羽院（増補新版）』を、用語の頻度によって可視化し、保田の意図した独自の後鳥羽院観の構造を考察することにある。以下に、テキスト『後鳥羽院（増補新版）』の目次を示す。

※1 保田與重郎『芭蕉』の構造可視化／谷口敏夫。京都光華女子大学研究紀要第47号（2009）

※2 保田與重郎『日本の美術史』の構造可視化／谷口敏夫。京都光華女子大学研究紀要 第46号、p102

既に1で述べたがこれは書き下ろしではなく、それぞれの初出を持つ。ただし、谷崎の考察では以下の1と2、7とは、あらかじめ保田が「後鳥羽院論」を意図してまとめたようである。なお（）内数字は文章量として頁数をいれた。下線は増補新版での追加分である。

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| <u>増補新版のはじめに</u> (2) | 7. 芭蕉の新しい生命 (17) |
| 序 (初版時) (3) | 8. 近世の發想について (12) |
| 1. 日本文藝の傳統を愛しむ (16) | 9. 蕪村の位置 (11) |
| 2. 物語と歌 (68) | 10. 近代文藝の誕生 (14) |
| 3. 宮廷の詩心 (14) | <u>11. 承久拾遺</u> (34) |
| 4. 桃山時代の詩人たち (13) | <u>12. 契沖と芭蕉</u> (11) |
| 5. 後水尾院の御集 (30) | <u>13. 國學の源流</u> (17) |
| 6. 近世の唯美主義 (16) | |

この考察を明確にするために、あらかじめ粗く抽出した用語群を分類し、その傾向から、詩歌関連用語や、固有の歌集、人名を正規化（名寄せ）し異同をただした。さらに用語間のクラスター分析をし、デンドログラム（樹形図）をつくり、この用語の配列をもとに文章地図（注：用語頻度の等高線グラフ）を作成した。地図上にあらわれたパターンをテキストにあたり、小概念として確定した。つまり、図書全体を構成する小さな概念の相互の関連を可視的に把握することが、本論の目的である。今回はこの文章地図が比較的明瞭に現れたので、便宜的にパターンの説明に際し島、ないし群島という言葉を使った。これは文章全体を大海原とみなし、そこに点在する小さな概念集合である用語群を島とイメージしたことによる。

テキストは新学社2000年『保田與重郎文庫4 後鳥羽院（増補新版）』で総頁が284でテキスト総量は204,480文字（18行x40字x284p）、400字原稿用紙換算をすると512枚の作品である。以下、この本文引用にあたり「～」は省略を意味する。実験に使用したKT2システムは自製である。

3 文章地図

まずテキストから、KT2システムで粗く様々な用語を取り出した。抽出した用語数は19349件、その異なり語数は6954種となり、用語の繰り返し率(6954/19349)は35.94%であった。

今回は詩歌用語、作品名、歌人を中心に予測して採取した。これらに手を加えずに整理したのが表1である。この表からテキストの傾向、語彙、用字用法の全体像がつかめ、そこからより精緻な文章全体の地図ができる。すなわちテキストの中に含まれる用語分布のパターンを可視化することになる。

3.1 用語の分類

ここでは人名や事項名について、表1であらかじめ概略を把握し、さらに後述3.2の精緻な名寄せ作業を行うことになる。この表1は荒い抽出によって、頻度13以上の用語210件を頻度とともにまとめたものである。全体の異なり数が6954種あったので、頻度上位3%の表といえる。表1からはテキストの特徴がいくつか見られたので以下に概略を記す。

(1) 人名の概略

人名で上位には27名が挙げられた。以下()内数値は頻度とする。

芭蕉 (327)	秀吉 (47)	實朝 (23)
後鳥羽 (166)	宣長 (46)	言水 (23)
蕪村 (103)	利休 (39)	頼朝 (20)
西行 (103)	西鶴 (37)	後白河院 (19)
秋成 (79)	泰時 (26)	山陽 (18)
契沖 (61)	鬼貫 (25)	家隆 (16)
後水尾院 (60)	定家 (24)	遠州 (16)
明恵 (56)	子規 (24)	紹鷗 (15)
來山 (54)	家持 (24)	釋阿 (13)

ただし「明恵」はあらかじめ「明恵上人(16)」を加算し「明恵(56)」とした。

この上位頻度27名の筆頭は芭蕉(327)であり、後鳥羽院(166)はその半数に過ぎない。このことは二つの意味を持っていて、一つは『後鳥羽院(増補新版)』が芭蕉を主テーマにした図書である可能性。一つは、実は後鳥羽院を指示する文中の用語は「院」が多く、「院は」「院の」と言うように「院」だけ単独で使われているのは400事例を越える。しかしその用例は後鳥羽院だけではなく、後水尾院や後白河院でも同様なので、本稿では自動識別ができないので「院」を外した。もともと後鳥羽院が大きなテーマであることの実実は変わらないので、そのように扱った。この図書は後鳥羽院と芭蕉とを扱ったもので、両者は時代的な前後関係にあるとした。

まず、それぞれの簡単な分類をしておく。歌人としては、後鳥羽院(166)、西行(103)、後水尾院(60)、藤原定家(24)、大伴家持(24)、源實朝(23)、藤原家隆(16)、釋阿(13)：藤原俊成、と8名を数えた。後鳥羽、後水尾の両院や実朝は歌人としておさめた。

俳諧関係者は、芭蕉(327)、蕪村(103)、小西來山(54)、西鶴(37)、上島鬼貫(25)、正岡子規(24)、池西言水(23)、と7名もあがり、後鳥羽院という中世鎌倉時代初期・新古今和歌集の中心人物を記した図書としては、江戸時代俳諧関係者が多い。蕪村(1716-1783)は江戸時代・天明の人で芭蕉(1644-1694)より百年後に芭蕉を再興した。芭蕉、來山、鬼貫、言水は西鶴や西山宗因の談林俳諧からの脱却を図った17世紀の同時代人である。子規は明治人。

他に秋成(79)。上田秋成(1734-1809)は保田によれば近代に通じる作家とされている。契沖(61)、宣長(46)は江戸時代の著名な国学者。明恵(56)は後鳥羽院から高山寺(京都市右京区)を賜った華嚴宗の僧で、後鳥羽院を隱岐島に追放した後の鎌倉執権・北条泰時(26)をなじり、後日に師事され教導した。

秀吉(47)、利休(39)、小堀遠州(16)は桃山文化を形成した人物達。ただし遠州は秀吉のあと家康に仕え江戸時代初期の作庭家として名高い。武野紹鷗(15)は利休の師匠。源頼朝(20)は鎌倉幕府初代征夷大将軍で西行と面識があった。後白河院(19)は第77代天皇で、82代の後鳥羽天皇からは祖父にあたる。

表1 用語の頻度 (13 頻度以上の用語、210/6954 異なり上位 3%)

頻度	用語	頻度	用語	頻度	用語	頻度	用語	頻度	用語
327	芭蕉	42	作品	24	定家	18	山陽	15	見出
200	詩人	42	考へ方	24	信念	18	江戸	15	開花
197	日本	41	雄大	24	趣味	18	吾妻鏡	15	影響
181	精神	40	明憲	24	子規	18	規模	15	いのち
166	後鳥羽	40	北條	24	古今集	18	歌風	14	發生
121	歴史	40	文章	24	家持	18	意識	14	歴史観
113	文藝	40	英雄	24	イデオロギー	18	さび	14	北條氏
107	思想	39	變革	23	實朝	17	藝能	14	文學者
103	兼村	39	利休	23	態度	17	學問	14	批判
103	西行	39	文人	23	詩心	17	國風	14	悲痛
94	文學	38	自然	23	古代	17	文藝上	14	背景
91	表現	38	源流	23	言水	17	天明	14	日本文藝
91	時代	37	批評	22	性格	17	天皇	14	朝廷
90	御製	37	俳諧	22	象徴	17	上人	14	大様
87	意味	37	桃山	22	承久肥	17	現代	14	綜合
85	傳統	37	天才	22	小説家	17	記録	14	善政
79	秋成	37	西鶴	22	鎌倉	17	希望	14	水無瀬
72	文化	37	丈夫	22	遠島	17	サロン	14	人工
68	物語	35	民族	22	ダンテイズム	16	隱遁	14	深刻
61	生活	34	元禄	21	創造	16	明憲上人	14	新島
61	契冲	33	増鏡	21	純粹	16	否定	14	失敗
61	近世	33	美學	21	至尊調	16	心持	14	御心
60	後水尾院	33	自覺	20	頼朝	16	自信	14	後世
60	偉大	32	わが國	20	武家	16	感覺	14	感傷
59	承久	31	萬葉集	20	日本人	16	家隆	14	院宣
58	近代	31	作者	20	中心	16	遠州	14	意志
55	世界	31	我國	20	御集	16	おどろの下	14	わび
54	來山	30	傳説	20	京都	15	變貌	13	釋阿
54	最後	30	歌合	20	完成	15	抒情	13	國學者
54	宮廷	29	慟哭	20	運命	15	理想	13	幕府
54	永遠	29	悲劇	20	絢爛	15	復興	13	放浪
53	發想	29	悲願	19	關係	15	晩年	13	反對
51	新古今	28	發見	19	萬葉	15	地下	13	日常
49	あはれ	27	若干	19	著者	15	大精神	13	千五百番歌合
48	民衆	27	至尊	19	生命	15	組織	13	人物
47	秀吉	27	古典	19	新風	15	蕉風	13	樹立
47	決意	26	文壇	19	後白河院	15	紹騰	13	作家
46	宣長	26	泰時	19	感動	15	少年	13	御幸
45	武士	26	人間	18	國學	15	女性	13	建設
45	ことば	26	系譜	18	嚴肅	15	述志	13	血統
44	王朝	25	存在	18	文學史	15	御歌	13	形式
43	藝術	25	鬼貫	18	指導者	15	孤島	13	貴族

(2) 事項名 (作品・詩歌用語など) の概略と分類

表1に表れた用語を6つの項目と「その他」に分類し表2とした。

・文明歴史観 頻度総数(1846)

保田の著作には「文明観」「歴史観」用語が頻出する。

表2 用語の分類 頻度13以上 210用例 (合計頻度は7131)

人名	文明歴史観	文学芸術	和歌俳諧	武断政治	その他
327; 芭蕉	197; 日本	200; 詩人	90; 御製	59; 承久	60; 偉大
166; 後鳥羽	181; 精神	113; 文藝	49; あはれ	54; 宮廷	54; 最後
103; 蕪村	121; 歴史	94; 文学	37; 俳諧	45; 武士	54; 永遠
103; 西行	107; 思想	91; 表現	34; 元禄	44; 王朝	47; 決意
79; 秋成	91; 時代	87; 意味	30; 歌合	40; 北條	41; 雄大
61; 契沖	85; 傳統	68; 物語	27; 古典	24; イデオロギ	28; 發見
60; 後水尾院	72; 文化	53; 發想	26; 文壇	22; 鎌倉	27; 若干
40; 明恵	61; 生活	45; ことば	24; 趣味	22; 遠島	26; 人間
16; 明恵上人	61; 近世	43; 藝術	23; 詩心	20; 武家	25; 存在
54; 來山	58; 近代	42; 作品	22; 象徴	18; 指導者	23; 態度
47; 秀吉	55; 世界	40; 文章	21; 至尊調	17; 天皇	22; 性格
46; 宣長	48; 民衆	39; 文人	20; 御集	15; 孤島	21; 純粹
39; 利休	42; 考へ方	37; 批評	20; 京都	14; 北條氏	20; 絢爛
37; 西鶴	40; 英雄	37; 天才	19; 新風	14; 善政	20; 中心
26; 泰時	39; 變革	33; 美学	18; 歌風	13; 幕府	20; 完成
25; 鬼貫	38; 自然	31; 作者	18; さび	13; 貴族	19; 關係
24; 定家	38; 源流	30; 傳説	18; 江戸	14; 院宣	18; 嚴肅
24; 子規	37; 桃山	29; 悲劇	17; 天明	14; 朝廷	18; 規模
24; 家持	37; 丈夫	29; 悲願	17; サロン	14; 新島	17; 希望
23; 實朝	35; 民族	26; 系譜	16; おどろの下	14; 失敗	16; 否定
23; 言水	33; 自覺	22; 小説家	15; 御歌	14; 水無瀬	15; 變貌
20; 頼朝	32; わが國	22; ダンディズム	15; 蕉風	13; 御幸	15; 組織
19; 後白河院	31; 我國	21; 創造	15; 述志	13; 血統	15; 少年
18; 山陽	29; 慟哭	19; 萬葉	15; 地下	530;	15; 女性
16; 家隆	27; 至尊	19; 著者	15; 抒情		15; 晩年
16; 遠州	24; 信念	19; 感動	15; 復興		15; 見出
15; 紹鷗	23; 古代	18; 文學史	14; わび		15; 開花
13; 釋阿	20; 日本人	18; 國學	650;		15; 影響
1464;	20; 運命	17; 藝能			14; 大様
	19; 生命	17; 學問			14; 綜合
	18; 意識	17; 國風			14; 人工
	17; 上人	17; 文藝上			14; 發生
	17; 現代	16; 隱遁			14; 批判
	17; 記録	16; 感覺			14; 悲痛
	16; 心持	15; 理想			14; 背景
	16; 自信	14; 文學者			14; 深刻
	15; いのち	14; 日本文藝			14; 御心
	15; 大精神	13; 作家			14; 後世
	14; 歴史観	13; 國學者			14; 感傷
192;	1846;	1494;			14; 意志
					13; 放浪
					13; 反對
					13; 日常
					13; 人物
					13; 樹立
					13; 建設
					13; 形式
					955;

日本の精神的な支柱を朝廷の雅に求めた保田は、その典型として中世鎌倉初期の「後鳥羽院」および関連する新古今和歌集を挙げた。それを破砕したのが鎌倉幕府（北条氏）であって、以後日本の正統としての美（宮廷の雅）は地下に潜り（地下：じげ）、隠遁詩人たちに受け継がれ、最後の後継者として芭蕉が現れた。と言う観点からこのテキストは、＜日本精神の歴史をとらえた文明歴史観の書である＞と言える。

・文学芸術 頻度総数 (1494)

「詩人」が先頭にある。保田は文学・芸術との関係のあるなしに関わらず「詩人」という用語をよく用いる。ある人物を評価する際、一篇の詩や小説を描かなくても、その人生全体をして詩人として認めることがある。『現代畸人傳』に登場した多くの人物は明らかにこうした「詩人」であった。

萬葉 (19) をここに含めたが、保田が萬葉集ではなく「萬葉」と使うときは古代・上代での詩的な風景や人心を表すことが多く、「詩人」と近似である。

・人名 頻度総数 (1464)

テキストに表れた人名はすでに (1) 人名の概略、で述べたところである。芭蕉 (327) が後鳥羽院 (166) を超えて最高頻度を得たのは既述のとおり「院」の扱いによる。しかし芭蕉がどれほど保田の『後鳥羽院 (増補新版)』で重きをなしているかは、この頻度数からも明瞭に分かる。

・和歌俳諧 頻度総数 (650)

先述のように『後鳥羽院 (増補新版)』では芭蕉が重きを持つ。後鳥羽院から芭蕉への道の継承を説く本書では、和歌と俳諧とを区別することは難しい。表に現れたジャンルとしては全く別物であるが、芭蕉およびその復興者蕪村の世界では、和歌と俳諧とをことさら区分しなくてもよいと考えた。

特徴として、一般用語「御製」、特殊用語「至尊調」をここに含めた。いずれも天皇と和歌の世界で使われる用語であるが、特に「至尊調」は後鳥羽院の歌を表現するための言葉として使われている。

詩人は又後鳥羽院が萬乗の尊身を以て描かれた、あの燦爛とした都の日と、孤島に所謂遠島御歌合を催されてゐた日を合せ考へ、最大の規模の詩を味はつたのである。し

かもそのいぶせき伏屋の日に、なほわれこそは新島もりよと歌はれた、鬱勃とした雄大の帝王の至尊調を拜して、詩人と英雄の、必然の深刻な運命を、限りなく味はつただらうと思はれる。王朝の愛情生活の文藝的テーマだつた歌と物語は、こゝで一變して詩人の歴史と人生観上のテーマとなつたわけである。さうしてほゞ五百年間、武家戦國の世の詩人たちは、つねに院を仰いできたのである。＜2 物語と歌＞

細かなことではあるが「至尊」は天皇を指す用語として、分類の「文明歴史観」に含めた。

・武断政治 頻度総数 (530)

ここには承久変、北条氏、鎌倉幕府など朝廷と武士との対立関係用語を含ませた。これらの用語は、保田の全著作の中でも負の意味を持っている。保田は鎌倉の武断政治およびその文化、ないし禅宗文化に殆どなんの価値も認めていない。その妥当性の是非はおくとして、保田はこれらを嫌っている。その原因の確かな所は、鎌倉幕府が後鳥羽院を遠島にした点に尽きるであろう。

・作品名 頻度総数 (192)

千五百番歌合 (13) は作品名にそぐわないが、新古今和歌集 (51) の前段階としてあげた。増鏡 (33) には後鳥羽院の史実に近い歴史が描かれていて、最初の「おどろのした」「新島守」「藤衣」の三章がそれにあたる。作者は、二条良基^{*3}とも考えられている。承久記は主に＜13 承久拾遺＞で言及されている。保田はこの軍記物に批判的である。

それにしても、同じ軍物語として見るとき、承久記の暗さはあはれを超えてゐた。第一義の純粹は、この背後によむより他なかつた。増鏡の方が、第一義の文化を解した心が描いてゐるだけでも美しい。鎌倉武士が鎌倉武士として名を現してくるのは、承久記が初めであるが、そのころの武士のいのちをかけた暮し方の、しかも陰惨なさまは、平家物語やそのまへの作品で見るとすべもないことだつた。その武士の一黨としての結び方には、武士道といふもののどんな人倫もまだないのである。むしろ古い平家物語の美しさが、はるかに武士の純粹を歌つてゐたものだ。＜11 承久拾遺＞

※3 日本古典文学大系「神皇正統記・増鏡」のうち、増鏡の校注、解説など時枝誠記、木藤才藏（昭和40）より。

(3) 用語の傾向

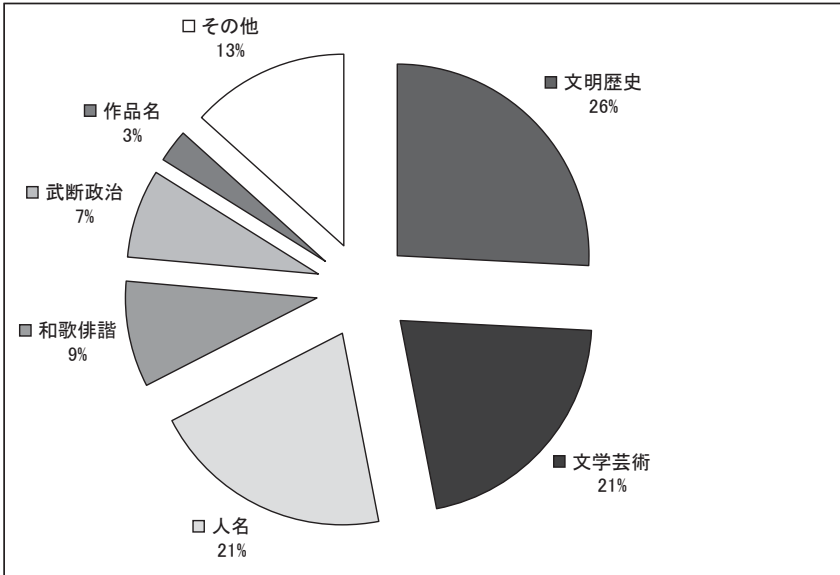


図1 『後鳥羽院』用語の傾向

表2の分類内容を図1の円グラフにした。この図1から本テキストでの用語

頻度の傾向をまとめておく。

図1はKT2システムで自動抽出した用語19349件(異なり:6954)のうち、頻度が13以上の210用例を荒く大分類したものである。

<文明歴史観(26%)>、<文学芸術(21%)>、<人名(21%)>、と3つの大分類がほぼ均衡している。人名については「院」を後鳥羽院、後白河院、後水尾院と分離せず、数値として加えなかったため、実際は<文明歴史観>

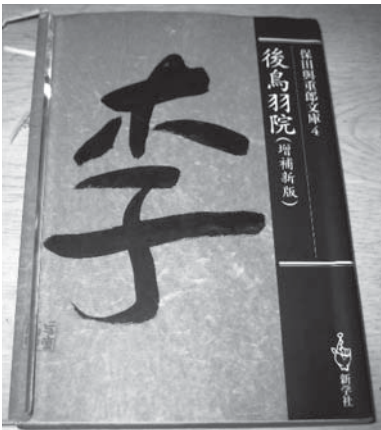


図2 後鳥羽院 (増補新版)

に匹敵すると思われる。

<和歌俳諧 (9%)>と<武断政治 (7%)>が近似の割合になった。大ざっぱにいうと、<和歌俳諧 (9%)>は<文学芸術 (21%)>からの派生で、<武断政治 (7%)>は<文明歴史観 (26%)>からの派生である。それぞれをまとめると、文学芸術が30%、文明歴史観が33%となりほぼ等しい。これまでの保田の著作分析から見て、著しく異なっていない。

3. 2 事項と人物の認定

この項ではテキスト『後鳥羽院 (増補新版)』に現れた多様な用語を正規化、すなわち先述の大分類項目を後述する一定の名寄せし、正確な頻度を測り、経験則からその上位13項目を選び、その内訳を表3とした。なお表1の大分類表と数値が異なるのは、ここでは正確な名寄せを行ったからである。

(1) 事項・人物の名寄せについて

表3に表れた事項・人物は、表1から上位頻度の用語を抽出し、人名、作品名、事項名を全体のバランスを考えながら適度にとり、次に各用語に関連の深い別の用語を表1および全用語の中から拾った。この場合、拾う用語は頻度2以上のものとした。出来上がった全体表をさらに俯瞰し、必要に応じて新規の代表名を立てて、各用語を統合した。

たとえば表3では、◎新古今和歌集【107】とは、{新古今 (51)、定家 (24)、家隆 (16)、千五百番歌合 (13)、隠岐本新古今 (3)} であると表現した。最初の「◎新古今和歌集」は◎印で基本用語 (代表名) とし、その右に代表名の頻度総数を【107】と表示した。つまり、テキストには勅撰集「新古今和歌集」関連の用語が107回表現されたとなる。この内訳は例示した新古今 (51) 以下五つの用語である。

表3 人物・事項の名寄せ（表中の◎印は用語群の代表名を表す。）

◎松尾芭蕉【376】	承久（59）	明恵上人（16）
芭蕉（327）	武士（45）	高辨（4）
元祿（34）	北條（40）	◎隠遁【37】
蕉風（15）	泰時（26）	隠遁（16）
◎和歌【346】	承久記（22）	隠遁詩人（11）
西行（103）	鎌倉（22）	隠遁者（6）
御製（90）	武家（20）	院以後隠遁詩人（4）
あはれ（49）	吾妻鏡（18）	
歌合（30）	北條氏（14）	
古今集（24）	幕府（13）	
實朝（23）	承久軍物語（7）	
釋阿（13）	承久兵亂記（5）	
和歌（8）	承久三年（2）	
和歌所（4）	◎国学【138】	
和歌集（2）	契沖（61）	
◎後鳥羽院【319】	宣長（46）	
後鳥羽（166）	國學（18）	
増鏡（33）	國學者（13）	
遠鳥（22）	◎新古今和歌集【107】	
至尊調（21）	新古今（51）	
おどろの下（16）	定家（24）	
孤島（15）	家隆（16）	
新島（14）	千五百番歌合（13）	
水無瀬（14）	隠岐本新古今（3）	
隠岐（7）	◎豊臣秀吉【86】	
水無瀬宮（4）	秀吉（47）	
水無瀬殿（3）	桃山（37）	
水無瀬山（2）	秀吉好（2）	
水無瀬河（2）	◎上田秋成【81】	
◎俳諧【312】	秋成（79）	
蕪村（103）	秋成傳（2）	
來山（54）	◎萬葉集【74】	
俳諧（37）	萬葉集（31）	
西鶴（37）	家持（24）	
鬼貫（25）	萬葉（19）	
子規（24）	◎後水尾院【67】	
言水（23）	後水尾院（60）	
俳諧師（7）	後水尾院御集（7）	
俳諧の精神（2）	◎明恵【60】	
◎承久変【293】	明恵（40）	

(2) 事項・人物の概説

以下に名寄せした用語群の解説をする。

-1 ◎松尾芭蕉【376】

この用語群には芭蕉（327）その人と、関係する時代名・元禄（34）およびスタイル・蕉風（15）を加え、他の俳諧関係用語は別途「◎俳諧」としてまとめ、松尾芭蕉を独立して扱った。

後鳥羽院を対象とした図書にこれほど芭蕉が含まれているのは特異なことであった。後述の◎後鳥羽院でも述べるが、単独の芭蕉（327）と後鳥羽（166）とを較べると、人名相当の芭蕉が二倍を占めている。後鳥羽院が「院」一文字で表現されているのは事実だが、芭蕉の扱いが『後鳥羽院（増補新版）』で常識を越えているのは明白である。

-2 ◎和歌【346】

◎和歌には、後鳥羽院、新古今和歌集、万葉集以外の和歌に関係する人物や用語を含めた。西行（103）は当初◎新古今和歌集に組み込むことや、また独立した用語とする考えもあったが、西行は和歌全般に深く関わるところから、◎和歌に組んだ。

実朝（23）は源家の棟梁として武家全般の中に組み込む考えもあったが、金槐和歌集に関連する人物として、この時代の和歌全般としてみた。

-3 ◎後鳥羽院【319】

至尊調（21）はここに含めたが、別途表1の至尊（27）は天皇を表す言葉として至尊調とは異なる。保田は至尊調を後鳥羽院の歌に使っていると考えてよい。

私がかつて「明治の精神」と題して述べた文章の一章に於て、殊に丈夫ぶりの源流を遠く後鳥羽院の至尊調より回顧したことは、また國風を中心とする文學史に對する見解としてであつた、それはあへて古い大津皇子にまで遡らずともよいし、又治まれる王朝に於てその様相が、表現を不用として表情に入つてゐるといふやうなことは改めて云ふ必要はない、我々の志をもつた者の詩心がどこを流れてきたかと云ふことは重要な事實である。それが私には丈夫ぶりといふものの歴史と思はれた。<3宮廷の詩心>

増鏡 (33) と、おどろの下 (16) は、後鳥羽院の美的生活を描いた「増鏡」の第一巻「おどろのした」から「おく山のおどろの下もふみわけて道ある世ぞと人にしらせむ」の歌を媒介にして、◎後鳥羽院に組み込んだ。

また遠島 (22)、孤島 (15)、新島 (14) はいずれも後鳥羽院が承久変で破れ北条執権によって島根県隠岐島に流されたことから、◎後鳥羽院に組み込んだ。この場合、増鏡の第二巻が「新島守」であり、後鳥羽院御製「われこそは新島もりよおきの海のあらきなみ風こゝろしてふけ」を媒介にしている。

水無瀬 (14) および、{水無瀬宮 (4)、水無瀬殿 (3)、水無瀬山 (2)、水無瀬河 (2)} は、現在の水無瀬神宮 (大阪府三島郡島本町) 一帯をさし、後鳥羽院の離宮「水無瀬殿」の跡地と言われている。また後鳥羽院の名歌として、「見渡せば山もと霞む水無瀬川ゆふべは秋となに思ひけむ」がある。

4 ◎俳諧【312】

ここには芭蕉以外の江戸期俳諧関係者や用語を納めた。特に蕪村 (103)、來山 (54) はそれぞれ独立した人物として扱えるほどに頻度が高いが、◎和歌での西行 (103) の扱いに準じ平衡させた。

5 ◎承久変【293】

ここには承久 (59) や承久三年 (2) で代表される承久変そのものと、承久記 (22) のような中世軍記物語と、そして北条 (40)、泰時 (26) ら鎌倉幕府執権に代表される武家という、3つの流れが組み込まれている。

6 ◎国学【138】

国学という言葉に代表される契沖や宣長は保田の作品には必ず出現する。頻度数 138 というのは多い。

7 ◎新古今和歌集【107】

保田は「新古今」と終始省略名で表示した。定家 (24) は藤原定家 (1162-1241) で、後鳥羽院の院宣による新古今選者の一人。家隆 (16) は藤原家隆 (1158-1237) で、新古今選者の一人。後鳥羽院は、定家との縁は途切れたが家隆とは終生の交流があった。千五百番歌合 (13) は建仁三年 (1203) ころ記録完成した。以下に引く。

歌合を以て王朝遊戯文學の極といふことは全般に於て正しいであらうが、千五百番歌合に於ては、その絢爛さに於て、すでに遊戯より發したものは、文化となり、文學の王國的表現をかなへたのである。これはわが國の永久な美と情緒と趣味の裁可者であつた宮廷の一つの源流的意義の廣大な表現の一つであり、かくて敕撰集中心の歌史から云へば新古今集の前行として存在した千五百番歌合は、さういふことを離れ去つて王朝文藝のモニュメンタルの意味を後世に於てもつに到つた。〈2 物語と歌・三〉

隱岐本新古今(3)は、後鳥羽院が隱岐島に配流中に新古今和歌集から数百首を切り接ぎしたもので、重要文化財(1996年)に指定された冷泉家の「新古今和歌集(隱岐本)上」がある。保田は隱岐本について折口信夫の話に感動したと伝えている。

詔敕に通じてゐた歌が、王朝の短歌になるについては、帝の歌主上の歌を下民に傳へるための傳達様式から來たものであるといふ説がある。これは折口信夫博士の意見である。さて私は「隱岐本新古今集」の博士の序文を始めてよみ、感動を味つたのである。恐らく後鳥羽院を顯揚して、先後に追隨なからしめるものであらう。そして私の後鳥羽院論が或ひはこの上に何もかも加へ得ぬかもしれないことに満足したのである。私がかつて芭蕉の暗示に心ときめかした過程を、折口博士が巧みに描いてゐるからに他ならない。〈1 日本文藝の傳統を愛しむ〉

・8 ◎豊臣秀吉【86】

保田は豊臣秀吉を政治家や武人としてよりも、藝術家としてとらえている。勿論、秀吉本人が絵を描くとか焼き物を焼くというような意味ではなくて、桃山という絢爛たる芸術の世界を作つた頂点の人として、秀吉を見ている。

・9 ◎上田秋成【81】

保田は上田秋成を近代作家に近似の者として評価している。日本浪漫派の同人で保田の友人でもあつた檀一雄や太宰治、特に後者を念頭においているように想像する。

～さうして秋成の背後にあつたものは、京阪の貴族的市民を通じて、足利末期から徐々に武家に入り、秀吉の出現によつて、日本を支配したあの、紹鷗、利休、と永徳、宗達の趣味の背景と同じものである。時には徳川氏執權の太平に鼓腹するといつた秋成は、宮廷の趣味を近代へ中繼した。この作者の己を以てつくりあげた近代小説家は、そのまゝ、西洋小説の移入した日に於て耐へうる「進歩した」「小説家」であつた。〈10 近代文藝の誕生〉

-10 ◎萬葉集【74】

萬葉集は、保田にとって芭蕉と等しく巨大な存在である。

後鳥羽院の意義は、古い上代から流れてきて主潮として萬葉集の中へとけ込んだ歌と、萬葉の末路の家持のサロンを中心に發生し、彼の周圍に集つた十數人の奈良朝の美女によつて育まれた相聞歌の調べが、どんな形で堂上に入り、一方地下の方へとのびていつたかを考へるとき、さらにそれが王朝となつてどんな變化をしつゝ、數百年を流れたかを思ふとき、その末期の劃期者として又綜合者としての意味もわかる筈である。

< I 日本文藝の傳統を愛しむ >

-11 ◎後水尾院【67】

時代は異なるが、後鳥羽院を追慕する後水尾院として評価している。400年以上の時を隔てた二人には、前者は鎌倉幕府北条氏、後者は江戸幕府徳川氏と大きな違いはあるが、環境や詩才に同質のものがある。

-12 ◎明恵【60】

明恵（1173-1232）は和歌山県出身で幼児期に神護寺で仏門に入った。華嚴宗の興隆につとめ、後鳥羽院から^{とがのお}梅尾を譲られて高山寺を開山した。

-13 ◎隱遁【37】

「院以後隱遁詩人」は保田の重要な用語である。「院」とは後鳥羽院を指し、承久変に破れた後鳥羽院が隱岐に流されたことで、宮廷の文化文明が鎌倉の武斷政治に打ちのめされた。だがその間、宮廷の雅は隱遁者や地下（じげ）の人たちによって守り伝えられ、近世の芭蕉に至ってそれが人々の間に開花したと考える。我が国固有の歴史観、文明観である。

4 クラスタ分析

クラスタ分析をつかって、表3の人物・事項にまとめた用語群の相互関連を図3とした。この手法^{*4}については従来行ってきたものである。

※4 谷口敏夫「三島由紀夫『豊饒の海』」の分析に詳しく述べた。

4. 1 事項・人物のクラスター分析

この図3（デンドログラム：樹形図）は、4.2で後述する図4（事項・人物地図）が用語の位置情報から、そのパターンを二次元表示することに比較して、位置情報の隣接度計算から用語集合間の類似性を導き出している。図3から各用語群の近似や収束状態をながめ、特に顕著なクラスターの解釈をする。

図3からは非常に単純で明瞭なクラスターと、蓋然的にしか指摘しにくい中クラスターとが混在している。明瞭なクラスターの一つは {◎松尾芭蕉、◎俳諧}、もう一つは {{◎和歌、◎後鳥羽院} ◎新古今和歌集、◎承久変} である。

(1) {◎松尾芭蕉、◎俳諧}

芭蕉と俳諧とで明瞭なクラスターを形成するのは「当然」のことに思えるが、しかしこれは保田のテキストに散在する芭蕉関係、俳諧関係の用語をその位置によって距離を測り、デンドログラムを導き出したという機械的な操作の結果である。いわゆる「意味」が入り込む余地はない。要素の一つ「芭蕉」という用語も、その意味を考えて距離を出しているわけではなく、たとえばXという無意味な記号に置換しても同じ結果がでる。私は「文章とは人工の極地」と考えている。それぞれの用語の意味をシステムが解釈できなくても、文章という用語の海の、どこにどのような用語を用いて文章を編んだかは、作者の意識的な操作の結果である。それをクラスター分析したとき、このような結果がでるといふ事実は、用語間距離を分析する当システムの意義を担保すると考える。

(2) ◎国学～◎上田秋成

このクラスターはいくつかが集まっている。明瞭なのは {◎豊臣秀吉、◎後水尾院} と、 {◎萬葉集、◎隱遁} ◎明恵、の二つである。この二つを上田秋成で束ね、さらに国学でまとめる結果が出たが、分明ではないので保留する。

(3) {{◎和歌、◎後鳥羽院}、◎新古今和歌集} ◎承久変

後鳥羽院と和歌とのクラスター形成は妥当である。新古今和歌集は後鳥羽院が実質的に選者となった勅撰和歌集であるから、和歌、後鳥羽院、新古今和歌集は明瞭なクラスターを持ち、実質として強い意味的な近接を持つ。

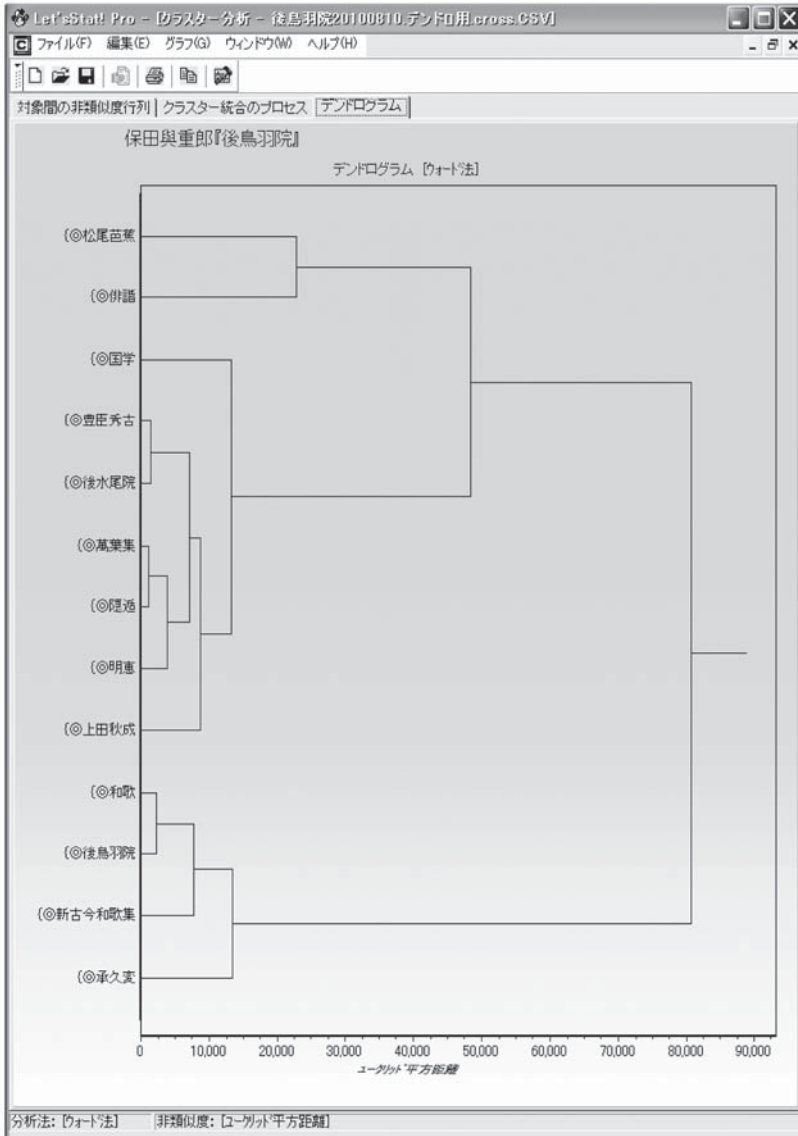


図3 事項・人物のクラスター分析

その三つを包み込むように承久変があるのは、保田が打ち出した「院以降隠通詩人の系譜と芭蕉」の発端が、承久変において鎌倉幕府北条氏が後鳥羽院を隠岐島に遠島としたことにある。また保田が愛読した増鏡の章立ても、おどろの下、新島守とあることから、後鳥羽院と承久変とのクラスター形成は、あらゆる点からみて妥当と言ってよい。

4. 2 事項・人物地図に表れた小概念

図4は、クラスター分析した結果から得た用語間の隣接の程度を、等高線(地図)の用語並びに適用したものである。具体的には、図の右上端から表れる項目「◎承久変、◎新古今和歌集、◎後鳥羽院、～」以下の並びは、図3の左下端から上端に向けての項目並びから得たものである。すなわち、図4の横並び(X軸)は文章の通時性によって<1日本文藝の傳統を愛しむ>から<13國學の源流>までを一意に確定し、縦並び(Y軸)はクラスター分析の結果によって、用語位置の隣接度から用語群を並べたものである。この図4を、図書『後鳥羽院(増補新版)』の文章地図として考えてみる。

その前に図3のクラスター分析によるデンドログラムと図4との相違は、これまでも述べてきたが、重ねて説明する。まず図3の、統計手法の一つであるクラスター分析の結果は、テキスト中の比較的頻度の高い用語が、テキストの位置を基にしてどのくらい近・隣接して表れたかを示す。すなわち用語間の隣接度を得るための手法としてクラスター分析を使った。

次に、そのクラスター分析によってクラスター(用語の組みあわせ)が表示されるが、そのクラスターそのものを詳細に分析するよりも、そこから得られた用語間の「列挙の様子」を得ることに主眼を置く。たとえば、「◎承久変、◎新古今和歌集、◎後鳥羽院、～」という列挙に注目するわけである。この列挙の順序は用語間の文章内の位置による相関係数によって導かれたもので客観性を持つ。

以後図4に現れる用語の固まりは大海に浮かぶ島と見なして解釈を加える。

(1) 文章地図全体の概略

図4を俯瞰してみると、図の上下によって二つの群島が見える。右側の用語群で指示すると、{|◎承久変、◎新古今和歌集～◎明恵|}と、中央の◎隠通を挟んで、下段の{|◎萬葉集、◎後水尾院～◎松尾芭蕉|}である。つまり上段は「後鳥羽院」群島、下段は「芭蕉」群島と呼べる。これは書名や章名および図4の用語の連なりからの群島名であり、著者保田の意図を外れてはいない。つまり図4から見ても、明らかに『後鳥羽院(増補新版)』は後鳥羽院だけではなく「芭蕉」も大きなテーマである。この二つの大きなテーマがテキストでどのように組み合わせられているのかについて、いくつかの解釈があり得る。以下には通常的通時的分析および共時的分析の前に、二つの群島パターンという視点から分析をしておく。

-1 後鳥羽院・群島

図4の上段では6つの島が形を見せ、そのうち<13 國學の源流>と用語◎承久変とが重なる所だけが小島と言える。さらに子細に見るなら上段は用語{|◎後鳥羽院、◎和歌|}という対語によって群島が形成されている。用語◎新古今和歌集が後鳥羽院の勅撰和歌集であることから、後鳥羽院・群島とは、◎後鳥羽院と◎和歌とによって成り立っていることが地図(海図)から明瞭に分かる。

ここで用語◎承久変が孤立しているように見えるが、承久変とは承久三年(1221)の後鳥羽院による鎌倉幕府追討という事変で、このことにより後鳥羽院が破れ、以後18年間隠岐島(島根県)に遠島となったことから、◎承久変は◎後鳥羽院と重なる用語である。◎承久変が前半<2 物語と歌>と後半<11 承久拾遺>に現れて、途中姿を見せないのは、後鳥羽院の和歌に重点が移っていたからである。以上のような分析とともにこの図4の上段を見るなら、これをもって後鳥羽院・群島の成立は明らかである。

-2 芭蕉・群島

松尾芭蕉は江戸時代・近世の俳諧師である。このことから図4の下段は、章立ての上で近世を扱った中盤に固まってくる。上段の後鳥羽院・群島が図書の全編を通して現れることに比較して、芭蕉・群島はやや中盤に集中している。

やや孤立している {◎豊臣秀吉、◎後水尾院} は安土桃山時代から江戸時代初期にかけての人物で、時代的には元禄の芭蕉よりも前の人になる。この関係からみると『後鳥羽院（増補新版）』は編年を意識していることがわかる。

以上2例から判定できることは、このテキストは二つの群島（大テーマ）を持ち、後鳥羽院・群島が全編を覆い、中盤に芭蕉・群島が姿を現していることが分かる。このことから、『後鳥羽院（増補新版）』は保田が提唱した「院以降隠遁詩人の系譜（その最後の詩人芭蕉）」という考えの確立していることがパターンから読み取れる。また初版からの増補分は {11 承久拾遺、12 契沖と芭蕉、13 國學の源流} の3章分だが、この3章分が無い場合には、前半に後鳥羽院・群島が大きくあり、中盤からそれと交代するように芭蕉・群島が現れたと絵解きできる。よって蓋然的には、3章分の追加によって承久変の解釈（明恵の存在）や萬葉集や契沖を導入し、国学という視点から後鳥羽院と芭蕉との関係を明確にしたといえる。

(2) 文章地図の通時的分析

本論での通時的分析とは、テキストの冒頭から末尾にかけて、各章の順序を時系列と見なし、個々の用語ないし用語群（図4では縦並びに列挙された用語）がどのような遷移を示したかを分析することである。

図4の上段 {◎後鳥羽院、◎和歌} は第一章の<1 日本文藝の傳統を愛しむ>に始まって<11 承久拾遺>までほぼ間断なく現れている。よって、用語群の {◎後鳥羽院、◎和歌} が本テキストの主調だと断定することができる。

このことと相補的に {◎俳諧、◎松尾芭蕉} は、<6 近世の唯美主義>から<10 近代文藝の誕生>まで濃密に連続して現れている。特に<7 芭蕉の新しい生命>では、二つの群島が重なり、その直前や直後は芭蕉・群島が、後鳥羽院・群島を補完している。

この通時的分析から、先の概略に追加して<10 近代文藝の誕生>で終わっていた初版では、後鳥羽院に始まり芭蕉で終わっていたが、増補新版で3つの

章を追加することで芭蕉から承久変への復帰があり、より後鳥羽院を鮮明にし、あわせて< 12 契沖と芭蕉 >、< 13 國學の源流 >は国学の視点で芭蕉から後鳥羽院への復帰を計ったと絵解きできる。

ここで、一見して孤島に見えるパターンについて通時的な解釈のもとに絵解きしておく。まず {◎豊臣秀吉、◎後水尾院} は、保田が秀吉を芸術家と見ていたことと、後陽成天皇を通しての皇家に対する勤皇精神からパターンが如実に表れた。後水尾院は、院が徳川幕府と対立したことや、院が極めて明らかに「後鳥羽院」を尊敬し顕彰していた事実から、本テキストに目立って引かれたと考ええてよい。

(3) 文章地図の共時的分析

先に通時的分析の一端にふれ、次は共時的分析をみってみる。これはある時点(すなわち章ないし節)で、どのような用語群が共に出現(共起)しているのかという視点でみた分析である。以下に顕著な共起パターンを章の始めから順に見ていく。

< 1 日本文藝の傳統を愛しむ >では、{◎後鳥羽院、◎和歌、◎松尾芭蕉}と3つの用語群の共起が明瞭である。一般に文章構成上、冒頭の章には全体を形作る小さな概念の多くがそろっているが、本テキストにおいても、後鳥羽院と芭蕉という二つのテーマが、この最初の章に色濃く顕れていて、そのパターンは顕著といえる。

< 2 物語と歌 >では、{◎承久変、◎新古今和歌集、◎後鳥羽院、◎和歌}と4つの用語群が共起し明瞭なパターンを表している。この箇所はテキストにおける二つの中心のうち、後鳥羽院に関して集中的に描かれている。承久変という政治的争乱と、新古今和歌集という著名な文芸とを合わせ含んだ後鳥羽院の実像がこの章ないしこの図書全体の中核と考えられる。

< 5 後水尾院の御集 >では、{◎後鳥羽院、◎和歌、◎後水尾院、◎豊臣秀吉}が共起している。これは後水尾院が後鳥羽院を尊敬していたことと、豊臣秀吉の朝廷への崇敬にくらべ、徳川幕府の朝廷無視が丁度鎌倉時代の後鳥羽院の立

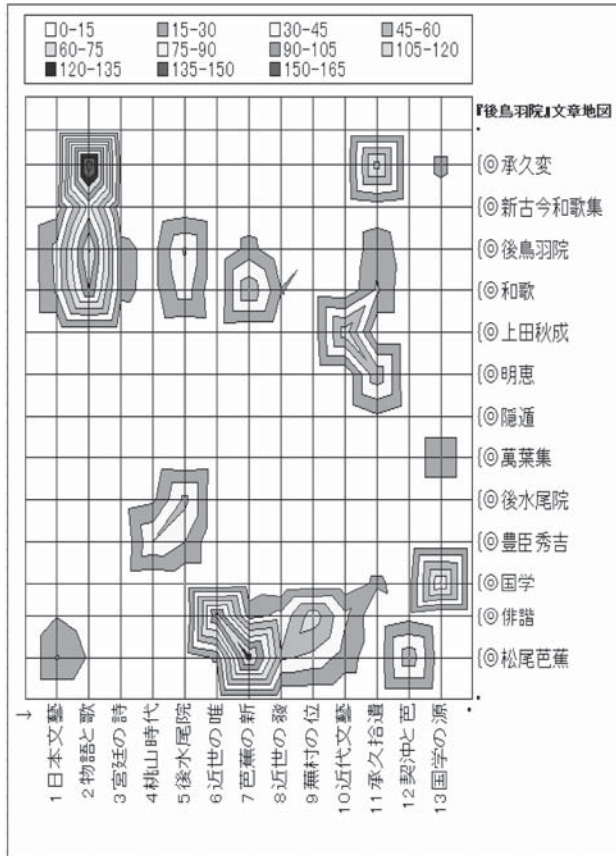


図4 事項・人物地図

場と似ていることから、明瞭な共起パターンを形成したと考えられる。

<7 芭蕉の新しい生命>では、{|◎後鳥羽院、◎和歌、◎俳諧、◎松尾芭蕉|}の4つの用語群が共起している。形態的にはこの章の{|後鳥羽院、芭蕉|}共起が最も明瞭である。一般には和歌の後鳥羽院、俳諧の芭蕉であるが、このような明瞭なパターンは、芭蕉が後鳥羽院から約500年後に、院を顕彰する後継者としてこの世に現れ、俳諧を正したという保田説から導かれたものである。

<10 近代文藝の誕生>では、{|◎上田秋成、◎俳諧、◎松尾芭蕉|}が共起し

ている。保田は秋成を近・現代小説に直結する作家として描き、芭蕉よりも百年遅れて現れた秋成を、まるでねじくれた現代作家を扱うようにあやしている。秋成は百年前の芭蕉を否定し、同時代の本居宣長に喧嘩を売っている。それが成功したわけではないが、保田はそういう秋成を近・現代作家・小説の嚆矢と見たのだろう。

今からいへば、秋成、蕪村は、自らにして既に近代である。元禄の芭蕉は桃山に開花變貌した中期の藝術の系統の、返り花の偉大なものであらう。この偉大さは前代にない偉大である。この封建の丈夫のいきをうけた志の文學は、秋成に於て近代に變化した。

< 10 近代文藝の誕生 >

< 11 承久拾遺 >では、|◎承久変、◎後鳥羽院、◎和歌、◎明恵、◎國學|と5つの用語群が共起した。京都高山寺の明恵が共起するのは、明恵が後鳥羽院から高山寺を賜り承久変後には鎌倉執権北条泰時に対して、武家の行動について説教したという歴史的経緯からである。以下には繋がりが薄いと思われる国学について引用しておく。

～さうして後鳥羽院以後隱遁詩人の美學が、多數は美の宗教となり、従つて個性の獨性を示すことよりも、古人の咏嘆をある雰圍氣の中で巧みにくりかへすことに、詩の巧みさや生甲斐を味つたことは、どれもこれも同じ理由によつて生れたことである。契沖や宣長といふ上方風の氣質と隱遁詩人の性格を多分に傳へた國學者の思想には、この代々の隱遁詩人の心持が少くなかつたのである。その頃の人の考へた古典的時代と云へば云ふまでもなく後鳥羽院以前であつた。古典とは契沖の所謂「武臣威を振ふ」以前の宮廷の文化をありのまゝに描いた作品であつた。< 11 承久拾遺 >

< 13 國學の源流 >では、|◎承久変、◎萬葉集、◎國學|が共起した。国学というものが江戸元禄の契沖『万葉代匠記』に方法論の基礎を見るならば、|◎萬葉集、◎國學|の対については問題が無い。それが◎承久変と共に起ることが本テキストの特徴だと言える。この解は次の引用にある。

當時の文人學者の中にも、國と民を思つて、武家政府の法律顧問とか文化顧問となつたものがないわけでないが、さういふものが今になつて果して文人の積極的なものと云へるだらうか。眞の日本古典の精神を、文人として祭祀したものでなければ、我國では決して文人の積極的なものと云へないのである。～私はさういふ形で北條氏の善政を認める側の文人でないのである。契沖も亦文人として、北條氏の善政を稱することを許さなかつた人のやうに見える。彼は改觀抄の中で、日本の古典時代を規定して

るが、これは非常の志に發する考への現れである。私もその流れに立つ批評家であるから、古典と云へる文藝は、後鳥羽院時代でうちきるのである。〈13 國學の源流〉

(4) その他の特異なパターン

こうして通時的、共時的に分析してみると、後鳥羽院・群島と芭蕉・群島とが本テキストの双頭であり、順序としては後鳥羽院→芭蕉となり、まとめは増補新版によって追加された三編であると言ってよい。

次章では、通時的・共時的の統合面から、『後鳥羽院（増補新版）』全体をまとめておく。

5 まとめ

本論では、まず3.1でテキストに用いられている事項・人名用語を粗く抽出し、おおよその傾向をみた。図1の円グラフからは、〈文明歴史観〉、〈文学芸術〉、〈人名〉の3つに大分類される用語をほぼ均等に使っていることがわかる。さらに人名では、荒い抽出でも「芭蕉（327）」と高頻度で、書名にある「後鳥羽院（166）」の2倍近い数値である。このことは後鳥羽院が「院」で呼ばれていることが理由の一つであり、また「芭蕉」は「後鳥羽院」の美的世界や考えを引き継いだ近世最後の隠遁詩人としての位置付けから、主客逆転した様相を見せる、とも推測できる。この件については、後鳥羽院と芭蕉とが保田の中で主客どうであったかは、谷崎昭男の示唆があるが、今回は調査論考することが出来なかった。客観的事実として、『後鳥羽院（増補新版）』での「芭蕉」の頻度は人名として最高頻度であったということである。

次に3.2では、この事項や人物の詳細な異同を調べ、事項・人名を表3にまとめた。これは表1で単独の頻度が13以上の用語を意味的に精査してまとめた結果であり経験則によった。結果として、次の13件の用語（群）を選択し、内訳もしるした。その用語集の代表名を以下に再掲した。◎は用語群で、()内は正規化を施した後の頻度である。

- | | | |
|------------|--------------|-----------|
| ◎松尾芭蕉【376】 | ◎国学【138】 | ◎後水尾院【67】 |
| ◎和歌【346】 | ◎新古今和歌集【107】 | ◎明恵【56】 |
| ◎後鳥羽院【319】 | ◎豊臣秀吉【86】 | ◎隠遁【37】 |
| ◎俳諧【312】 | ◎上田秋成【81】 | |
| ◎承久変【293】 | ◎萬葉集【74】 | |

4.1 ではこの13件の用語群をクラスター分析した。方式としてユークリッド平方距離及びワード法により、テキスト中での用語間の距離を示したデンドログラムを得、これを図3「事項・人物のクラスター分析」とした。

図3からは、最上段の◎松尾芭蕉、と最下段の◎承久変、この二つが最も距離の隔たった関係と読める。また目立った大きなクラスターを3つ視認することができた。{|◎松尾芭蕉、◎俳諧}、{|◎国学、~◎上田秋成}、{|◎和歌、~◎承久変}である。それぞれの意味は本文でまとめたが、芭蕉と俳諧、後鳥羽院と承久変、というこの2つのクラスターはパターンとしても意味的にも、ほぼ完全なクラスター分析の結果といえる。その大きな2つのクラスターで、秀吉から秋成までを挟んだ状態が図3ではよく現れている。このことは、テキスト『後鳥羽院（増補新版）』は、評論構造の上からは骨太のかっちりした文章といえる。なによりも、芭蕉と後鳥羽院とが大きく明瞭なクラスターを形作っているところに特徴が現れた。

最後に4.2で、同じ13件の用語群を（文章）地図化し図4を得た。従来通り、文章中の用語頻度を等高線であらわす「文章地図化」の要点は、テキストという時系列にそった流れ（順序）を章立てで一意に確定し、用語群の配列をクラスター分析によって、すなわち用語の位置情報から用語間の類似・近接度を計算し、その結果で対象用語群を並べる方法を取った。この方法でテキスト『後鳥羽院（増補新版）』の可視化が計られ、図4からいくつかの明確なパターンを得た。

図4からは、全体として一番明瞭なパターンは、文章地図を◎隠遁を中心として、上下に分けてみると、◎後鳥羽院・群島と◎松尾芭蕉・群島、という二

つの図が浮かんでいることである。このまとめとしては、テキストが後鳥羽院と芭蕉という二つの系列を持っていることである。右端の用語群順序はクラスター分析の結果（ただし反転）そのものなので、用語群の隣接はこの順で視認できる。そこから、◎隠遁や◎萬葉集を、中心に置いて、あるいは結合点として、◎後鳥羽院と◎松尾芭蕉とが結ばれたテキストと、分かる。

通時的には、〈1 日本文藝の傳統を愛しむ〉～〈8 近世の發想について〉までが後鳥羽院のために費やされ、芭蕉は後半の〈6 近世の唯美主義〉～〈10 近代文藝の誕生〉で詳細に述べられたといえる。

通時、共時、両者のまとめとしては、増補新版としての〈11 承久拾遺〉、〈12 契沖と芭蕉〉、〈13 國學の源流〉の3篇は、後鳥羽院と芭蕉とを統合するための追加であり、これがテキスト全体のまとめとして機能しているといえる。

謝辞

データの整理について、葛野図書倶楽部 2001・坂口昭代副長 2003 の助力に感謝します。
(2010年9月24日)